

ドイツの脱原発と私たちの選択

去る11月17日夕刻、「ドイツがどのように“脱原発”をしたのか」について、ベルリン自由大学教授で、脱原発に関する倫理委員会のメンバーでもあったミランダ・シュラーズさんの講演に参加し、お話をうかがった。

ドイツの脱原発は、民衆の小さな一票から始まったという。

1983年、はじめて「緑の党」が議席を獲得。議会で質問が出来るようになった。それを後押ししたのはWWFをはじめとする大規模な環境NGOたちだった。

ほどなくチェルノブイリの事故が起こる。それはドイツの人たちに大きなインパクトをもたらした。社会的に脱原発の機運が高まった。ドイツ環境省は「自然エネルギー推進」を進める。

1998年、はじめて社会民主党と緑の党が政府を作る。これによりドイツは脱原発へ向け大きく舵を切ることになる。

2001年、脱原発を政府が表明。その後、2010年に政権が変わり、温暖化対策として一時原発の延長を表明するも、2011年の福島事故により、メルケル首相が「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」を緊急招集。

倫理委員会のメンバーには原子力やエネルギーの専門家は一人もおらず、社会学者や哲学者、芸術家や宗教家も含まれた。会議はTVなどで公開され、オープンに議論が進められた。この倫理委員会の論議の結果を重んじ、メルケル首相は脱原発を表明したのだった。(ミランダさんのお話の一部要旨ここまで)

ドイツは、最初に脱原発を表明した2001年まで約20年かかった。日本はどうか。

リスクを覚悟で少しずつ減らす道を選ぶのか。



その場合あと20～40年は付き合わなければならないだろう。その間に巨大地震の来ないことを天に祈りながら……。それともドイツのように即刻中止し、新エネルギーと脱原発へ全力を注ぐ道を選ぶのか。

私たちは今、それを決めることができる決定的なチャンスを迎えているといえる。

経済をとるか、脱原発か、二者択一では決していない。もちろん経済は大切である。ローンの支払いもあれば、養うべき家族もある。食べることは避けられない。しかし、経済を守ること＝原発をやめられないでは決していないのだ。ドイツの原子力企業シーメンスは、風力発電など自然エネルギーに大きく舵を切り、すでに収益を上げつつある。また、原発は発電コストが安いから経済的という宣伝は、「環境負荷や廃棄物処理、その後の補償まで含めると原発の発電コストは高くなる」という先ごろの枝野大臣の発言で、ようやく政府からもそうではないと表明された。

それでも、なぜ、今までやめられなかったのか。

それは、私たちが皆、ある種のマインドコントロールにかかってきたからではないか。

TV・マスコミを通じ、学者や政治家の発言を通して行われてきた安全神話と情報操作。これは一方に都合のよい情報を流すだけではなく、本当の情報を意図的に与えない、ということも含まれる。

さらに洗脳の常とう手段は、恐怖を与えること。計画停電や経済停滞の恐れなどを与えることで、原発や再稼働やむなしの空気を生み出して行く。これは今でも行われているとみてよいだろう。私たちが積極的に本当の情報を知ろうとしなければ、マスコミからは真実は見えてこないのだ。限られた情報しか与えられなければ、当然理性的判断は狂ってくるだろう。

頭は簡単にだまされる。目先の損得ばかりではない。偉い先生から安全だと言われれば、そうなのかと思ってしまうのだ。オウムの子供たちが、高等教育を受けた有名大学出身者たちだったように……。

そんな中で本質を見極めるには、私たちに宿る直感や本能、感じる力を使う必要があるだろう。

その人が本当のことを言っているのか、うそを言っているのか、本能的に見分ける力だ。そして、それは、着の身着のまま、子供を抱えて北の国まで逃れてきた母の感性だ。

原発に対して、一番最初を感じる私たちの感覚、その直感こそが正しい道へと私たちを導いてくれる。スマトラの津波から逃れたゾウのように、私たちに必要なのは危険を察知する動物的な本能ではないだろうか。

誤解を恐れずにいえば、原発問題は、電力会社の問題でも、政治家の問題でもない。私たちの問題だ。安全性よりも経済を優先させる政治家は、私たちが選んだのだ。それは、私たちが安全性より経済性を選んだということに他ならない。

今回の福島の事故で、はっきりと私たちが学ば

されたことは、環境と私たち、自然はすべてが一つにつながっていることだ。空気や水、森や川や海が汚染され、それは地球をめぐりやがて私たち自身をも汚すということ。地球を汚さないクリーンなエネルギーとして宣伝された原発がそうではないことも証明された。これではっきりわかったのではないか。それを容認してきたのは私たち自身なのだ。その責を私たち自身が今、受け取っているのだ。

私たちはまぎれもなく一つにつながるいのちを生きている。それは、アイヌをはじめとする先住民たちが一番大切にしてきた価値観であり、現代人が最も軽視してきた考えである。

私たちのそのバラバラに分離した思考こそが、すべての問題を生み出してきたといっても過言ではない。国や政府、電力会社や原子力村などの利権団体は決して敵ではない。彼らは私たちの中にある権力欲や金銭欲出世欲の表れに過ぎない。誰の中にもそれはあり、だからこそ目の前に出現しているのだ。

それらと戦うのではなく、自らの一部として認め、愛し、許そう。

その上で本当に望む世界を思念し、一人ひとりが出来ることから始めるほかないだろう。

私たちを超えた大きないのちの望みが叶え

られるように。

それはきっと、子どもたちを想う母の願い。

そう、誰もが平和で幸せに、安心して暮らせる世界なのだろう。

原発をやめるかそれとも維持するのか。その判断は最終的には私たち一人一人にゆだねられるだろう。

私たちがどんな未来を生きたいのか、それを決める力は、いま私たちの手の中にあるのだと信じる。

(まほろば編集部 島田 浩)

